

〔東京うこっけいの肉利用〕

産卵能力が低下した東京うこっけいの有効利用と加工品開発

鈴木亜由美

(畜産技術科)

【要 約】産卵能力が低下した東京うこっけいの肉を有効利用するため、450日齢の雌鶏にブロイラー用飼料を給与して肉質改善を図ったが、生産される卵の品質が低下した。烏骨鶏肉の加工品を試作して食味アンケートを実施したところ、良好な結果を得た。

【目 的】

東京うこっけいは産卵能力に優れた系統であり、都内農家に広く普及しているが、廃鶏の処理が課題であり、肉の有効利用が求められている。そこで、産卵能力が低下した雌鶏にブロイラー用飼料を給与して肉質改善を図るとともに、加工品や料理の素材としての利用方法を検討する。

【方 法】

産卵能力検定（150～450日齢）が終了した東京うこっけいを15羽ずつ用いて、通常飼料（採卵用飼料：レイヤー区）とブロイラー用飼料（チキンフード区）を4週間給与し、体重と産卵を記録した。生産された卵は卵質検査を実施した。試験鶏は試験終了後にと鳥して部位別に重量を測定し、各試験区8羽ずつ成分分析した。

（株）大多摩ハムに烏骨鶏肉を提供し、加工品をいくつか試作した。最も製品化が有望なハムについて、一般消費者を対象に食味アンケートを実施した。

【成果の概要】

- 1) 1羽当たりの精肉量はレイヤー区が438.4g、チキンフード区が491.0gで、歩留りはそれぞれ38.8%、39.7%であり、チキンフード区が若干高かった（表1）。
- 2) 試験期間中の生産卵について、卵黄色および卵殻強度、卵殻厚を比較したところ、チキンフード区は卵黄色と卵殻厚は試験開始5～6日目から値の低下が見られ、試験開始1週間目でレイヤー区と有意差がみられた（図1、2）。また、卵殻強度も試験開始2週間目でレイヤー区との差が有意となった（図3）。
- 3) 筋肉内脂肪含有率は、チキンフード区のももはレイヤー区よりもやや高くなったが、個体差が大きく有意差はなかった（図4）。試験期間中の産卵率が高い個体ほど脂肪含有率は低い傾向であり、チキンフード区の脂肪含有率は産卵率と高い負の相関がみられた。
- 4) 一般消費者62名を対象に、うこっけいハムの食味アンケートを実施した。見た目は「悪い」とした回答が多かったが、味やかおりについては半数以上が「よい」または「ややよい」だった（図5）。しかし購買意欲については半数が「しない」「分からない」と回答し（図6）、外見に加えて販売予定価格（980円/150g）も原因の一つと考えられた。
- 5) まとめ：ブロイラー用飼料の給与により肉質改善が見込めるが、コスト低減と卵質の安定が課題である。今後、食味アンケートの結果もふまえてうこっけいハムの改良を図り、製品化を目指す。

表1 450日齢から4週間の飼養成績

試験区	羽数	産卵率 (%)	増体率 (%)	精肉重量 (g)	歩留り (%)
レイヤー	15	15.7±17.3	4.4±7.2	438.4±79.6	38.8±3.1
チキンフト [®]	15	29.3±27.2	5.1±5.9	491.0±51.9	39.7±2.7

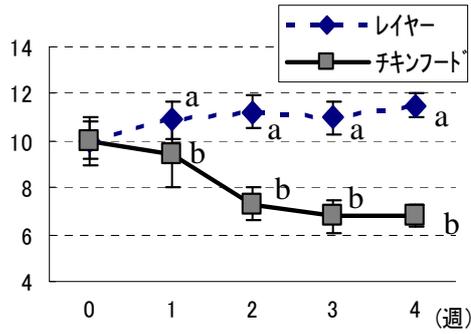


図1 試験期間中の卵質変化(卵黄色*)
*Yolk Colour Fan (1~15) による

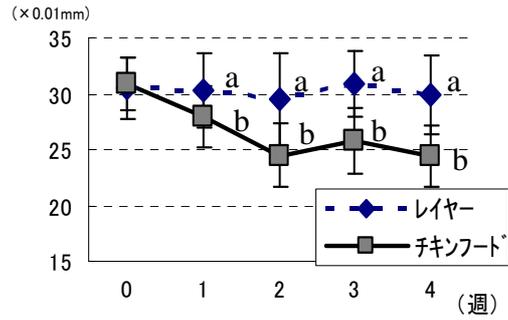


図2 試験期間中の卵質変化(卵殻厚)

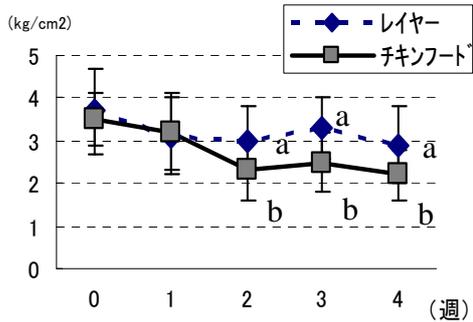


図3 試験期間中の卵質変化(卵殻強度)

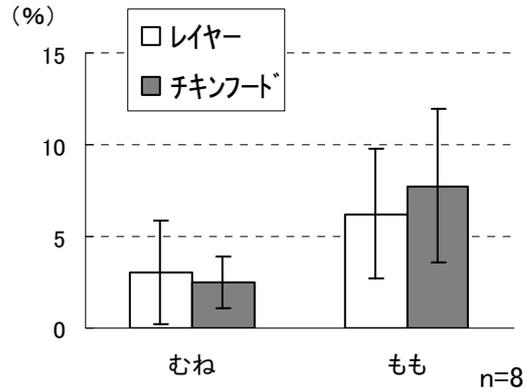


図4 各試験区の筋肉内脂肪含有率

a,b 異符号間に有意差(P<0.01).t-検定による.図表中の値は平均±標準偏差.

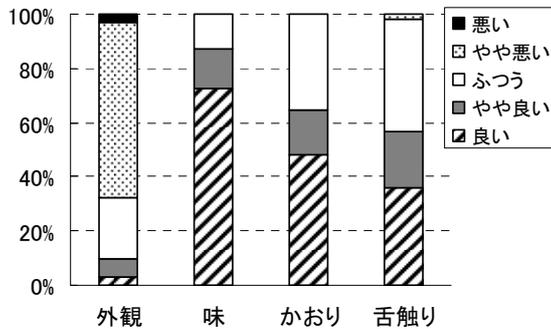


図5 一般消費者62名によるうこっけいハムの食味アンケートの結果

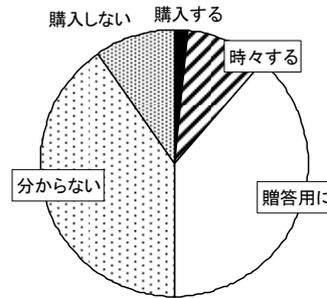


図6 問「このハムを購入しますか」に対する回答